

昭和42年度 (1967) 第7回大会

男子優勝 札幌西

女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

高体連誌 誌面の都合で掲載なし

優勝のよろこび

男子 札幌西高等学校

今度こそは優勝を、それを目標に、新たな段階に移ったのは冬休み間近な頃でした。昨年は力尽きて優勝を逸したとはいえ、2年生主体の構成であった事。伝統が生まれつつあった事などが手伝って、優勝、それも完全優勝という意識が急速に高まったのでした。そして私達は吹雪の中に走り抜き、日曜日を基礎体力と基礎技術に費やしました。幸運な事に雪どけは例年になく早く、新年度に入るとすぐコートを使える状態でしたし、コート整備も表面に土を入れるなど丹念に気を配りました。私達は先輩に、コートやラケットを大切にしない者は上手になれないと言われました。私達はまた、コートを自由に使えない他校の分までも一生懸命使おうと心掛けました。整備も序々に整い、連休の合宿を契機に練習もハードになる一方、計画に沿った合理的なものになっていました。

初の全道制覇の感激を受けたのは7月2日でした。決勝の対戦校は小樽潮陵高校。ダブルス、シングルス1・2の順に試合が始まり、まずシングルス1が勝ち1点、ダブルスもコンビネーションが好調でロブを上げては相手のミスを誘い、要所にスマッシュ、ボレーを決め、2点目を上げて優勝を決めました。しかしシングルス2は2時間半という接戦の末、敗れはしたもののその健闘は、私達に優勝とは違う大きな感激を与えてくれました。

団体戦の余勢に乗り、個人戦でもシングルス・ダブルス共に優勝し、文字通り完全優勝を成し遂げました。

今考えてみると、私達をそこまで持ってきたものは、私達自身の努力精進もあったとは思いますが、他校とは違う特徴があったと思う。それは顧問の先生との練習を通してかわされた3年間の対話、それによって培われた勇気と希望であったと感謝している。

優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

昭和42年、インターハイ出場、我々は、これを目標として、毎日の練習に励んできた。昨年は、完全優勝という、すばらしい成績を修め、今年もまた2連勝をと心に決め、毎日の練習が自分との戦いであった。

北海道は、冬、外で練習する事ができないため、トレーニングの重点を体力づくりにおき進めてきた。毎日廊下を走り、柔軟体操、ゲーム、フットワーク。体育館の使用できる日は、ストローク・ボレー、スマッシュ、サーブに汗を流して励んだ。又、高校の運動クラブとして、試合に勝つ事だけを考えず、自らの可能性に対する挑戦として励まし合い、全道大会を目指し一生懸命頑張り続けた。そして先輩達が残していった伝統と、我々のチームワークによって、勝利を得る事ができた。2年連続4度目の優勝、苦しかった練習の成果が実ったこの時程うれしく思われた事はなかった。

待望の全国大会に出場でき、今まで練習に励んできた苦しさは、一度に吹き飛んでしまった。全国の大会はすばらしく、試合を見ているだけで闘志がわいてくる。チャンスとあらばものすごい勢いで球が飛んでくる。

北海道は、1年間通してコートでは練習はできず、試合回数の多いところにくらべると、レベルは下回っている。その上、北海道ではテニスは高校からしか行われていないが、関東、関西は、小学校からラケットを握っている。このような状態の中で、良い成績を、といってもなかなか難しい。しかし、テニスに対する根強くひたむきな情熱が活路を開いてくれると信じ来年度を目指し毎日練習に励んでいる。

(札幌静修高校)

全国高校総体（第57回全国高等学校庭球選手権大会） 長野

女子 個人戦シングルス 優勝 沢松 和子（松蔭）